

平成 24 年度 海外臨床薬学研修報告書
「海外研修で描いた将来の薬剤師像」

研修期間：平成 24 年 8 月 19 日～9 月 1 日

研修先：南カリフォルニア大学薬学部

薬学部薬学科 5 年

080973460

松山 苑未

本研修で、8月20日から30日までの期間、南カリフォルニア大学でアメリカにおける薬剤師の役割について学んだ。研修中には、クリニカルツアーで薬局や病院を見学させていただいたり、南カリフォルニア大学の学生によるうつ病についての発表を聞いたり、大学の薬物治療学に参加したりした。

薬局見学では、南カリフォルニア大学の卒業生が経営する薬局に訪問した。アメリカは日本のような国民皆保険を取り入れていないため、個々の国民が保険会社と契約することで保険に加入する。保険会社により受診できる病院が指定されており、処方箋を持参する薬局も病院ごとに指定がある。日本ではどこの病院でも自由に受診でき、保険医療機関であれば同じように保険が適応される。病院で受け取った処方箋も保険薬局であれば全国どこでも持参することができる。保険制度以外にも、薬局で働くスタッフに日本と違いがあった。薬局には薬剤師以外にもテクニシャン、クラーク、レジデントがおり、薬剤師は監査・投薬・疑義照会、テクニシャンは調剤、クラークは処方箋受付・入力を行う。アメリカではレジデント制度があり、薬学部の学生が監査・投薬・疑義照会など薬剤師と同じ業務を行うことができる。ただし薬剤師による最終チェックが必ず行われる。日本ではテクニシャンはおらず、薬剤師が調剤を行う。テクニシャンが調剤をすることの利点としては、調剤にかかる時間を服薬指導などにあてることができるため、患者により正確な情報を提供できることである。レジデント制度も日本にはなく、学生が早期から医療現場に出ることで、大学で学んだことを生かしながら、より臨床に沿った知識や技能を習得することができるという利点がある。

他にも、南カリフォルニア大学が経営する大学病院の門前薬局を訪問した。この薬局の利用者は、大学の学生や病院の関係者が多い。処方箋に基づく調剤・投薬以外にも OTC の販売も行っており、多くの種類が販売されていた。施設内には調剤室以外に診察室があり、薬剤師による問診が行われる。薬による効果を判断したり、慢性疾患では検査値の推移などにより状態が安定しているかどうかを判断したりする。この施設では機械化が進んでおり、約200種類の錠剤を自動でボトルに詰める機械があった。アメリカでは基本的に、錠剤をボトルに詰めて患者に提供する。日本のようにシートで提供する場合と比べて、錠剤の安定性や有効性が確立されていない恐れがあり、清潔感も損なわれていると感じた。

病院見学では、南カリフォルニア大学の関連病院を見学した。外来の化学療法を行う専用施設で、そこで行われる化学療法は静脈内投与のみである。もし入院が必要な場合は別の大学関連病院に入院し、化学療法を受ける。施設内では、抗がん剤調整のための安全キャビネットが設置された無菌室や、化学療法を受けるためのリクライニング式の椅子やベッドが設置されたエリアを見学した。無菌室では特別な研修や試験を受けたテクニシャンにより抗がん剤の調整が行われていた。監査は薬剤師2名と看護師により行われており、テクニシャンの手元や部屋の様子がカメラで撮影されていた。日本では抗がん剤の調整は薬剤師によって行われている。アメリカに比べて無菌室内の管理も厳しく、調整者や施行者の被爆対策にも力が入っている。今回見学した無菌室では、調整者の服装が徹底されておらず、手技についても無菌性が保たれているかどうか疑問に思う点が多数あった。化学療法を受けるエリアには、開放的な場所と個人用の部屋があった。開

放的なエリアには椅子とベッドの両方が配置されており、患者の希望に合わせて選択でき、患者は軽食を食べたり、テレビを見たりしながら治療を受けることができる。化学療法専用の施設ということもあり、専用の椅子やベッドの数が多く、一度に多数の患者が治療を受けることができる。売店にはがん患者向けの帽子やカツラが販売されていた。日本で同様の施設を見学したことがないため比較できないが、院内の雰囲気が予想以上に明るく、清潔感があった。

南カリフォルニア大学では、現地の学生が行っている薬物治療学の授業を体験した。患者の問題点を SOAP 形式で解決していく。今回は2日ほどの授業で終了したが、本来は1つの疾患に数か月間かけることもあり、この授業には薬学部1年生の頃から参加する。名城大学にも薬物治療学の授業があるが、1つの疾患にかける期間は1週間で、4年生の数ヶ月間しか行わないため、圧倒的に時間数が少ないことがわかる。

アメリカでは薬学部に入學する前に、4年制の他大学で教養科目などを学び卒業する必要がある。薬学部に入學すると、薬局や病院などで研修をするための資格を取得することができる。これにより、早期から臨床現場に出て経験を積むことが可能となる。日本は高校卒業後に薬学部に入學することができる。名城大学では1年生で教養科目や基礎科目、2年生頃から専門科目、4年生で薬物治療学を学ぶ。その後調剤の手技を学び、OSCE を受験し、4年生までに修得した知識を評価するために CBT を受験する。OSCE と CBT に合格して初めて、長期の臨床研修を行うことができる。薬局と病院で11週間ずつ実習を行うが、アメリカに比べると短い。臨床現場での経験が少ないと、大学を卒業して薬剤師免許を取得しても、すぐに薬剤師として1人前に働くことは難しいと思う。

今回の海外研修で、アメリカの学生の向上心の強さを何度も感じた。アメリカでは日本に比べて薬剤師の地位が高く、他の医療関係者からの信頼も大きい。医師との取り決めにより、慢性疾患に関してはプロトコルに従って診断や治療に関わることができる。日本の学生もアメリカの学生の意識の高さを見習い、様々な知識をつけ、就業後に調剤以外の業務にも積極的に関わることで、これからの医療現場における薬剤師の存在意義が増えると思う。服薬指導に関しては日本でも力を入れており、円滑なコミュニケーションを図ることができるように変化してきている。調剤に関しては、日本では錠剤をシートで調剤していることもあり、清潔である。特に注射剤の混合は、無菌室の管理や手技について日本の方が優れていると感じたので、これからも徹底していくと良いと思う。

海外研修に参加する前は、アメリカの医療は日本の医療よりも進んでいるという観念しかなかった。しかし研修に参加して様々な体験をすることで、アメリカの見習うべき所と共に日本の誇るべき所にも気づくことができた。良くない所を改善し、良い所は伸ばすことで、より良い医療を提供できるようになると感じた。